自閉症児への水泳指導に関する研究

岩崎　巴菜（生涯スポーツ学科　地域スポーツコース）
指導教員　金田安正

キーワード：自閉症　水泳指導　対応法

１．はじめに

筆者は大学２年生の後期から障害児の水泳教室「イルカ」で水泳指導を行っている。今年６月から担当している Ｈ は、自閉症の中でも特有の様々な特徴を持つため、指導に苦戦した。そこで、自閉症児の水泳指導に関する文献から指導法を探った。しかし、直接該当する文献は見あたらなかった。そこで、Ｈを対象とした記録から、反応があったもの、なかったものをリストアップし、指導法の整理にあたった。さらにＨの家族や学校の先生、友人の様々なアプローチに対するＨの反応から、Ｈにとっていい対応、よくない対応を予測し、どのように水泳指導の導入へつなげていくべきかについて研究した。

２．研究方法

対象者は現在小学４年生、自閉症の女子Ｈである。

文献による自閉症児への対応を調査した上で、筆者とＨとの関わり方、家族や学校の先生、友人とＨとの関わり方の違いをみることから、指導法を検討した。

３．結果と考察

筆者、Ｈの家族等による様々なアプローチの分析図を作成した。アプローチに対して反応があったものを〇とし、反応がなかったものを×とした。家族等とＨの〇の項目は、筆者とＨの〇の項目と比べると圧倒的に多い。これは、筆者とＨの関わりの月日の短さ、筆者のＨに対する理解の浅さ、家族等とＨの関わりの長さ、理解の深さの差であると考えられる。

また、Ｈに対しての筆者と家族等の対応で〇の項目が共通するのは、下図で示すとおり、ジェスチャーを加えて行う対応であることがわかった。×の共通点からは、Ｈが興奮しているときに対応することであるとわかった。

このＨへの対応でいい対応と、よくない対応を整理すると、水泳指導の導入へつなげるための必須項目は次の３つである。

① Ｈの状態を把握する
② Ｈとある程度距離を置く
③ ジェスチャーを加える

４．おわりに

Ｈは、Ｈと家族等が築きあげてきた信頼関係、また毎日の積み重ねから、できるようになったことが多くある。このことから、Ｈへの水泳指導を行うには、上記の①、②、③を実行した上で、指導者もＨもお互いが向き合い、また、Ｈが指導者に対して信頼を寄せている関係が成立してはじめて水泳指導の導入へつながる。そのためには、ゆっくりと時間をかけることや、指導者の根気が必要であり、また自閉症児への対応をしっかり分析しておくことが大切であることがわかった。

テーマ	Ｈの状態	対　応	対応する人	Ｈの反応	評価
挨拶	――	顔を覗き込む	―筆者・家族等	―顔を反らす	－×
○○します	興奮しているとき	――	筆者・家族等	―顔を反らす	－×
	落ち着いているとき	―ジェスチャーを加えて	―筆者・家族等	―腕を組む	－○
近寄る	――	ジェスチャーを加えて	―筆者・家族等	―抱きつく 腕に掴まる	－○